

# 大むかしの人々

教科書文庫  
5  
301  
34-1948  
2000041374

購入 24年8月14日  
部 類  
教科書 10  
3年 号  
上 小学校

ねや  
曲  
号



文部省著作教科書

50029

教科書文庫

|            |
|------------|
| 5          |
| 300        |
| 34-1948    |
| 2000041374 |

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

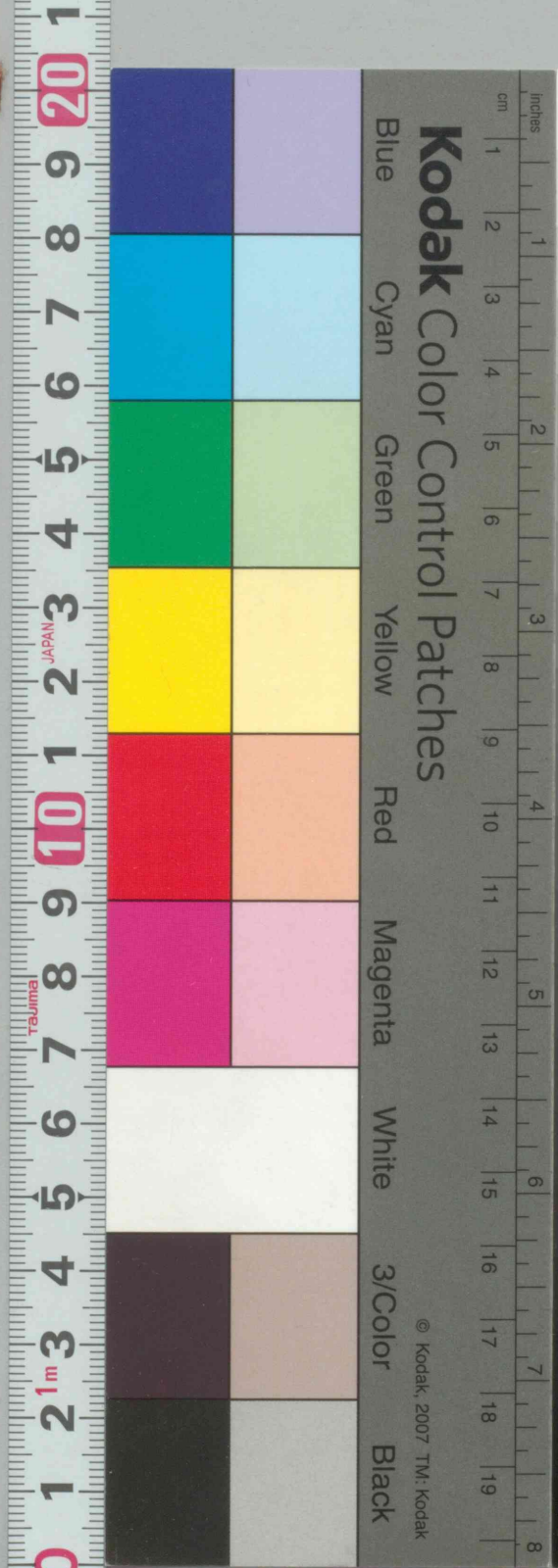


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



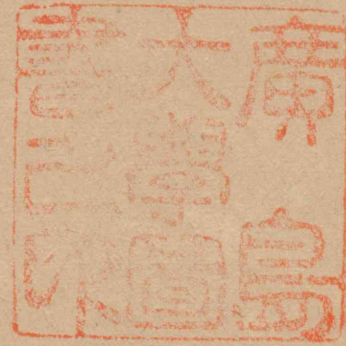
教科書文庫  
5  
301  
34-1948  
2000041374

資料室

375.9  
M014

大むかしの人々

広島大学図書  
2000041374



もくじ

- 一、まえがき……………三
  - 二、大むかしの入々……………一四
  - 三、私たちのそせんはどんな生活をしていたか……………六六
- 日本の大むかしの入々—

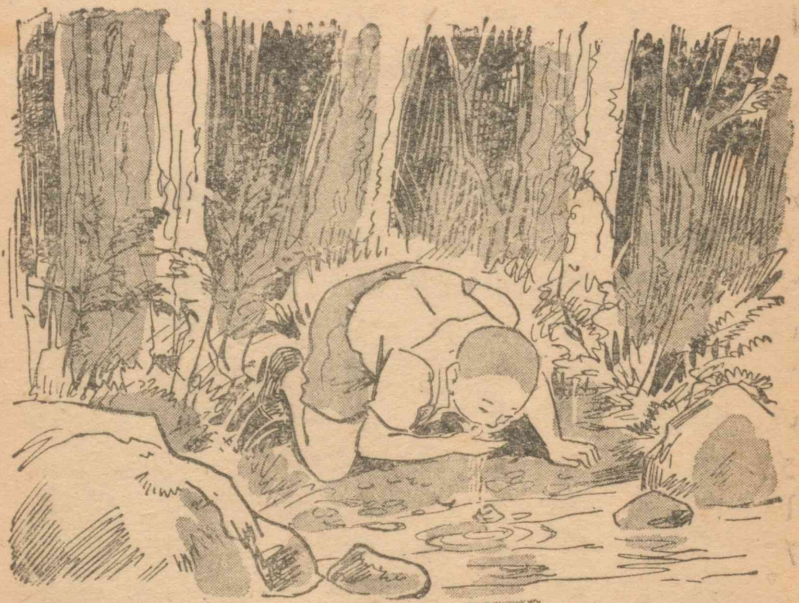
まえがき

森のなかで道にまよった少年

明くんは、森へあそびにいつて、とうとう道にまよってしまいました。なん時間もなん時間も、木のあいだをまよいあるきました。どうしても道を見つけないことができませんでした。一けんの家もみつかりません。あっちへ走ったり、こっちへ走ったりして、大きな声でたすけをよびましたが、だれもこたえてくれるものはありません。

しかし、明くんはゆうかな少年でした。なきたくなるのをじつとがまんして、歩きまわりました。おなかですくと、木の





みや草のみをとってたべました。  
のどがかわくと、いずみのふち  
できれいな水をすくつてのみま  
した。

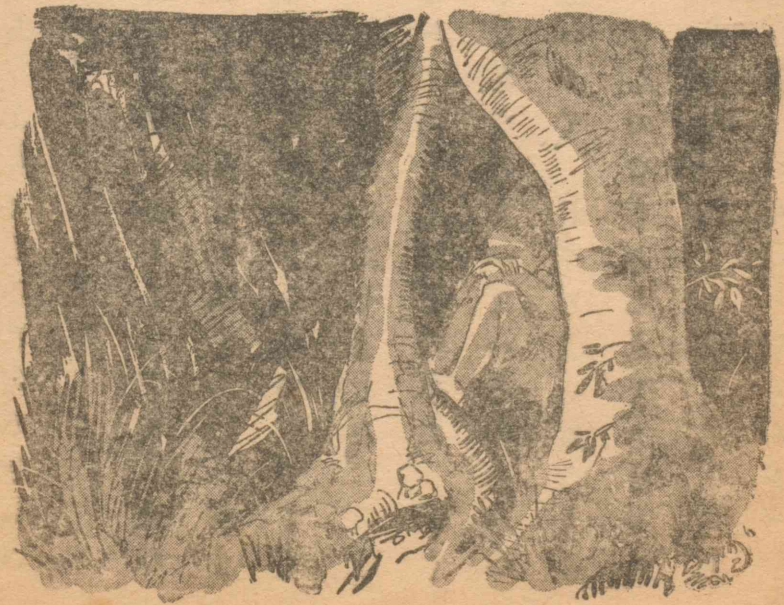
森のなかには、手でつかまえることのできる小さな動物もいました。また、明くんひとりでは、とても手におえない大きなこわい動物もみかけました。そんな動物をみると、どうしてみをまもつたらよいだらうかと、考えずにはいられませんでした。

また川では、つりの道具やあみがあつたらとることのできそうな魚も、およいでいるのをみました。

けれども、そのうちに、だんだん太陽がひくくなって、森のなかは、しだいに寒くなってきました。そして明くんは、おうちのこと、あたたかいおへやのこと、おかあさんのつくつてくださったおいしいごちそうのこと、などを思い出しました。

ある大きな木のところへきたとき、明くんはその木に、からだがそっくりはいれるほどの大きなあなのあいているのをみつけました。明くんはそのなかへはいつて、じつとよこになりました。あたりはもううすぐらく、なんの音もきこえてきません。あまり歩きまわったので、すっかりつかれていました。それに、おなかもすいていました。だれがいつたい、明くんをさが

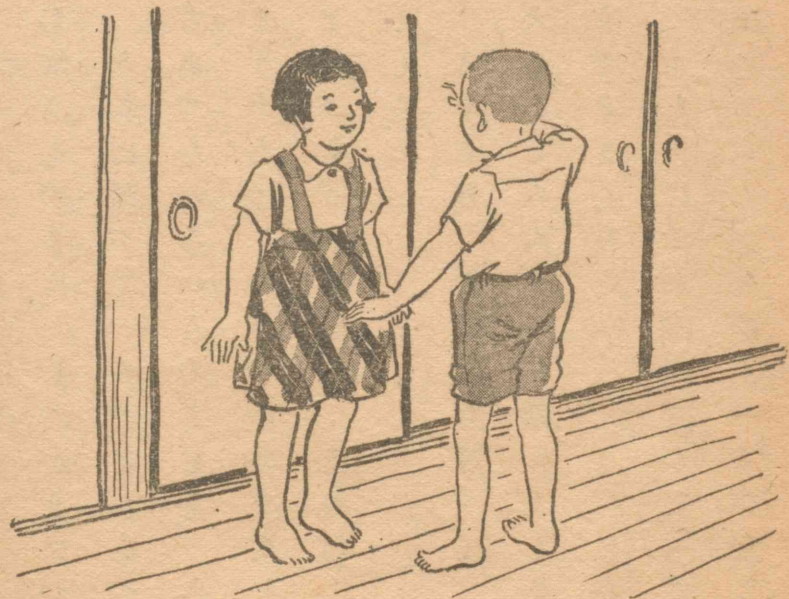
しだしてくれるのでしょうか。  
もし、だれもみつけだしてくれ  
なかったとしたら、明くんはあ  
すから、ひとりて、たべものを  
さがし、ねる場所をつくって、  
生きていかなければなりません。  
しかし、なん時間かたつたと  
き、そとで大きなさけび声がし  
ました。あかりがうごいている  
のもみえます。みんなが心配し  
てさがしにきてくれたのでした。  
明くんは思わず大声をあげて、



むちゅうであかりの方へ走りだしました。そして、なつかしい  
お父さんの手に、しっかりとつかまることができたのでした。  
うちに帰って、やっとおちついたとき、明くんは、森のなか  
であつたいろいろのことを、みんなに話しました。すると、お  
とうさんは、一さつの本をだして、「あしたでもよんでごらん。」  
とおっしゃいました。それは、むかしの人々のことをかいた本  
でした。

あくる日、学校から帰って、その本のいちばんはじめにある  
大むかしの人々のお話をよんでいるとき、明くんはこんなこと  
を考えました。

「もし、ぼくが森のなかで、だれにもさがしだされなかったら、  
きつと大むかしの人々とおなじようにくらさなければならなか



ったんだ。だけど、ぼくは、大  
むかしの人のようにうまくやつ  
ていったかしら。」

もしあなただったら、明くん  
のようなめにあっただとき、いつ  
たいどんなことをするでしょう。  
そのとき、ちようど、みちこ  
さんがあそびにきました。明く  
んは、森のなかで道にまよった  
ことを話しました。すると、み  
ちこさんはいいました。

「私なら、きつと、木を切つて

自分の家をつくるわ。そして、動物をつかまえておりようりするわ。そうそう、それに火をおこしておけば、あたたかいし、だれかがきつと火をみつけて、たすけにきてくれると思うわ。」

明くんはこたえました。

「でも、もしおのがなかつたらどうするの。それに動物は人間よりはやいんだから、鉄ぼうやナイフがなかつたら、つかまえることも、りようりすることもできない。火をおこそうとしても、マツチがなかつたら、だめじゃないか。」

そして、明くんはみちこさんに、大むかしの人々のことをかいてあるところをみせながらいいました。

「大むかしの人は、ぼくたちよりも、もつともつとふべんで、ひどいくらしをしていたんだ。」



あなたがたは、ロビンソン・クルーソーの話を  
きいたことがありますか。海のはなれ小島で、  
ひとりであらしていかねばならなかったクルー  
ソーの生活は、どんなだったでしょうか。

そこでふたりは、大むか  
しの人々のことについて、  
いつしようけんめいに考え  
はじめました。いつたい、  
ふたりはどんなことを考え  
たのでしょうか。つぎに、  
ふたりの考えたことを、か  
んたんにかいてみます。

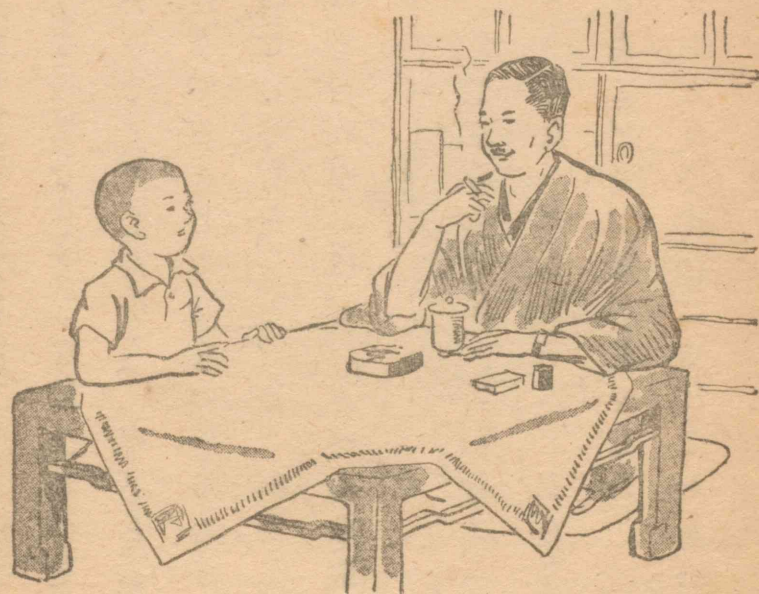
「大むかしの人々は、たい  
へんふべんなくらしをしていました。そのころには、人々は、  
家というものをみたことがありませんでした。歩くのにつごう  
のよい道もありませんでした。人々はまた、きものもみたこと

がありませんでした。火を使うことも知りませんでした。べん  
りな道具なども、なにひとつそろっていませんでした。そんな  
ありさまでしたから、寒さをふせいだり、たべものを手にいれ  
たりすることも、たいへんむずかし  
いことでした。きつと、私たちには  
考えられないほど、ふべんな生活だ  
ったでしょう。」

夕ごはんのとき、明くんは、おと  
うさんに、みちこさんとふたりで考  
えたことをお話ししました。  
おとうさんはにこにこわらいなが  
ら、「よく考えたね。このへやをみて







ごらん。私たちはいろんな道具  
をたくさん使っている。いった  
いこんな道具をつくることを、  
だれが考えたのだろうか。い  
すでも、つくえでも、みんなそ  
うだ。これはみんな、むかしの  
人たちが考えてくれたものだ。  
明が考えた大むかしの人々の生  
活とくらべると、私たちはたい  
へんべんりな世の中であらして  
いる。しかし、こんなべんりな  
世の中をつくりだしてくれたの

は、いったいどんな人たちの力だったのだろうか、明にわかる  
かい。それは、大むかしから今までの、たくさんのおくれた人  
たちの力なんだ。そして、ゆうめいな人ばかりでなく、明がい  
ちどもなまをきいたことがない、かぞえきれないほどたくさ  
んの人たちの力なんだ。  
とおっしゃいました。

二、大むかしの人々



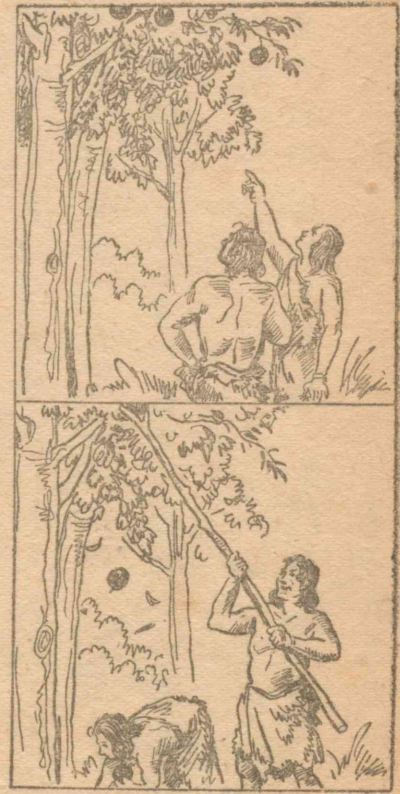
こんにちでは、私たちは、家をたててたのしくくらししていくことも、きものをきて寒さをふせぐことも、そしてまた、道具をつくってそれをうまく使うことも、よく知っています。しかし、ずっとずっとむかし、大むかしの、この世界に住んでいたいちばん古い人たちは、このようなべんりなくらしかたを、まったく知らなかったのです。人々は、あちらこちらを歩きまわ

りながら、木のみをひろい、さかなをとり、けだものをつかまえて、たべものにしていました。そして、手や、つめや、はななどを、たいせつなぶきにしていました。

しかし、人間がほかの動物とちがうところは、そのうちしいに、道具をつくりだして、それをうまく使うようになったということです。人間がどんなふうにして道具をつくりだしたのかはよくわかりませんが、だいたい、つぎにお話しするようなぐあいではなかったでしょうか。

人間はどんなふうにして、道具をつくるようになったのでしょうか

ある日のことでした。人間のそせんは、たべものをさがして歩いていました。すると、ある大きな森のなかで、おいしそ



な木のみが、高い木の枝にいつぱいみがつているのがみつかりました。しかし、せのびしても、とびあがっても、とても

とどきそうにありません。上のほうは枝がほそいので、のぼっていつても、とちゅうで枝がおれて、おちてしまひそうです。人間は、うらめしそうに、木のみをみあげながら、「ああ、もつと、手が長かつたらなあ。」と、ためいきをつきました。

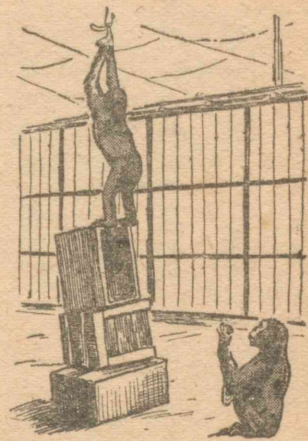
そのころの人間には、こんなことが、きつとなんかいもあつたのだと思ひます。そのたびに、たべものにこまつた人々は、

「どうすれば、うまくとれるだらうか。」と、くびをかしげて考へこみました。けれどもそのうち、どうとうだれかが、長い木のぼうがころがつているのをみつけて、それをひろいあげ、「ああ、そうだ。このぼうで、あの木のみをたたきおとせば、とれるのではないか。」と考へついたのです。

人々は、このようにして、ぼうを使って、今までとどかなかつた高い木のみもうまく手にいれることができるようになりました。ですから、ぼうは、人間の使ひはじめたいちばんさいしよの道具であり、またぶきでもあつたわけです。

人間は、それからのちも、おなじようにして、ぼうを使うかわりに石をなげて、木のみをおとしたり、けだものをたおしたり、また手のかわりに、かいがらで水をくみあげたりする、い

ろいろな方法をおぼえていきました。



チンパンジーがあきばこをつみかぶねて、バナナをとるところです。

かうまく道具を使うそうです。西洋のある学者が、このことをためしてみたことがあります。

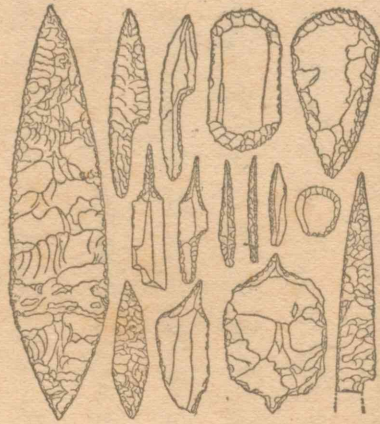
その人は、チンパンジーのはいつているおりのそとに、バナナをおいておきました。チンパンジーは、おりのなかから手をおぼしてみました。が、どうしてもとできません。しかしそのうちに、とうとう、そこにおいてあつたぼうきれに気がつくとい

それを使つてかきよせて、うまくとることができたといふことです。またチンパンジーの手がとどきそうにもない高いところに、たべものをつりさげておいたことがあります。するとチンパンジーは、はじめのうちには、せのびをしたりとびあがりして、とろうとしました。それでもだめだとわかると、そこにおいてあつた木のおきばこをもつてきて、その上につてとろうとしました。しかし、ひとつでは、とどきません。もうひとつかさねましたが、まだとどきません。とうとうみつみつみあげて、その上へのぼり、たべものをとつたといふことです。けれども、チンパンジーには、それ以上のことはできませんでした。道具を使うことを知つていても、道具をつくりなおして、もつとよいものにするにはできなかつたのです。また自

分の考えついたこと、発明したことを、しそんにつたえること  
も知らなかったのです。ですからしそんは、そせんからつたわ  
つたものを、自分のくふうでもつとべんりなものにしていくと  
いうことができませんでした。

石は、いちばん古い時代の人々にとって、ひじょうにたいせ  
つな道具でした。ことに、するどい石のかけらは、つかまえた  
けだものを切りひらく小刀のやくめをしましたし、ぶきとして  
またいへんべんりでした。しかし、そのような石は、ほしいと  
きにごどこにでもみつかるとはかぎっていません。人々は、石の  
多い川原へいつたり、山のなかをかけたまわつたりして、つごう  
のよい石を手にいれようと苦心していました。

ところが、こんなふうにして、道具にするのにつごうのよい



これは、石でつくられたさまざまな  
の道具です。つるぎ・小刀・へら・  
きりなど、いろいろのものがあ  
りました。

石をさがしているうちに、人  
人は、いろいろな石には、そ  
のかたちやおもさのちがいに  
よつて、それぞれべつの使い  
みちがあることに気がついて  
きました。そして、そればか  
りでなく、石のかたちを思っ

ようにかえることさえ、やってみるようになつてきました。

このようにして、人間のそせんは、道具  
をもつとよいものにつくりなおすことをは  
じめたのです。まずさいしよは、石と石と



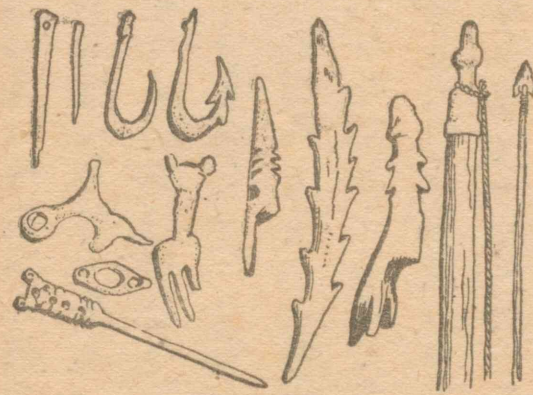
をうちあわせて、自分の思うようなかたちの道具をつくること  
でした。これは、なにかのひょうして、手にもつていた石を下  
におとしたとき、それがほかの石にあたつて、うすくわれるの  
をみて思いついたことかもしれません。また、このように、石  
と石とをうちあわせて、思つたかたちにするためには、かたく  
ておもい石を使うとうまくいく、ということもわかつてきまし  
た。

しかし、あなたがたも、きつとおわかりでしょう。石と石と  
をうちあわせて、自分の氣にいった石の道具をつくるというこ  
とは、たいへん時間のかかるくるしいしごとです。けれども、  
このめんどうな、こんきのいるしごとを、人々はいつしうけ  
んめいやりとおし、自分の思うような石の道具をつくつたので

した。よい道具さえ使えば、まえよりも、なんばいもなんばい  
もらくに、しかも早く、木を切つたり、物をけずつたり、つか  
まえたけたもののかわをはいだりすることができます。おいし  
いたべものも、たくさん手にいれることができるようになりま  
す。そう思うと、このことは、時間がかかつてくるしくても、  
がまんのできるしごとだつたといえます。

はじめのうちには、つくりかたもへたで、かたちのよいものが  
できませんでしたが、あれこれとくふうをかさね、いつそうべ  
んりな、そしてりつばなものをつくるようになりました。人々  
は、石と石とをこすりあわせてみかくと、石のさきがするどく  
なることに氣がつかまりました。またおなじようにして、石の道具  
のおもてを、なめらかに、きれいにみかくことも、思いつきま

した。こんなふうにして、はじめのころとくらべれば、たいへんすぐれた道具がつくられるようになってきたのです。ですから、そのころの道具には、ひじょうにこまかな、りっぱなさいくのものが見られます。



ほねやつのでつくられた道具です。つりばり・もり・ほりなど、いろいろなものがありました。

石おのにあなをあけて、そのなかに木のえをさしこむことは、なかなかほねのおれるしごとですが、このころになると、人々はそれもやれるようになりました。そのほか、かりをするのにべんりな弓矢が発明されてから、一えものも

ずっと多くなってきましたが、けだもののほねやつのは、かたいうえにかるいので、道具の材料にするには、たいへんべんりでした。そこで、石の道具をりっぱにつくった人々は、つの道具も、やはりみごとにつくるようになりました。

このようにして、しだいにべんりな道具ができてくると、これまで、手だけではとてもやれなかつたしごとが、かんたんに行えるようになりました。ですから、もうそのころ、道具は、人々の生活にとつて、なくてはならないものになっていました。

人間は、どうして火をおこしたか

「人間は火を使う動物である。」といわれています。火を使うことは、人間だけのできることで、ほかの動物には、まったくみられないことです。ですから、火をおこして、それを使うこと

は、人間が大むかしからしどげた発明のうちで、いちばん大きなもののひとつといえるかもしれません。

はじめ、人間は、火をたいへんおそろしいものと考えていました。あなたがたも、ものすごい山火事にあつたようなとき、はげしい火のいきおいをすぐ目のまえでみたら、思わず、「こわいなあ。」とつぶやくにちがいありません。そのころの人も、かみなりがおちたあとなど、大きな山火事がおこつたときには、こわくてからだかふるえるほどだつたでしょう。

しかし、人間は、山火事のあとに、



やけ死んでたおれていたけどものにくが、なまてたべるより、たいへんおいしいことに気がつきました。また、ふだんはおそろしいけどものも、火をみると、おそれてにげていくということも知りました。そこで、今までおそろしいと思つていた火は、人々のくらしに、いろいろと役にたつものだということが、だんだんわかってきたのです。こうなつてくると、これまでおそろしいものと考えていた火を、自分のすまいにもちかえつてみようという、ゆうかな人もあらわれてくるものです。さあ、そのような人の家では、いったいどんなふうに、くらしのしかたがかわつてきたでしょうか。

火を使いはじめから、人々は、たいそう寒いときでも、あたたかくすごすことができるようになりました。そのうえ、に





アフリカの人々のなかには、この絵のように、むかしのままの方法で、火をおこしているものもあるそうです。

そのまねをしたのかもしれない。とにかく、この発見をもとにして、人間は、かたい木のぼうを、いたの上でぐるぐると、けむりがでるまでまわしつづけ、そこからほのおがでて、木のくずにもえう

りあわせてみたのだ、と考えられています。ひよつとすると、人間は、森の木が風にふかれて、こすれあつて火をだしているのを見て、



あかりが、むかしから今まで、どんなふうにかわってきたか、しらべてごらんさい。

くも、火にあぶると、おいしくたべられます。夜になつても、すまいのなかはあかるいので、その火をかこんで、しごとをするのができます。このように、火を使うことによつて、人々のくらしは、まえより、ひじょうにべんりになったのでした。



火をおこすいろいろなやりかたを、上の絵から考えてごらん下さい。私たちは、今どんな方法で火をおこしていますか。

つるようにする、という方法を考えついたのでした。大むかしには、この方法がいちばん多く使われていたようですが、それにしても、たいへん時間がかかる、くるしいしごとだったわけです。今でも、アフリカなどには、こんな方法で火をおこしている人々がいるということです。

こんなわけですから、人々は、いったんおこした火は、けっしてけさないようにと、みんなで心をあわせ、ちゅういしあつていました。まきをすこしずつくべて、晝はもちろんのこと、ひとばんじゅう、火のばんをしておいたということです。

しかしそののち、人々は、もっとかんたんに火をおこす方法をみつめました。それは、かたい石と石とをうちあわせたり、鉄と石とをうちあわせたりして、火をおこす方法でした。こと



石のランプを使って、ほらあなのかべに、絵をかいているヨーロッパの大むかしの人です。今から75年ぐらいまえ、五さいの少女が、ほらあなであそんでいて、みつけたといわれています。

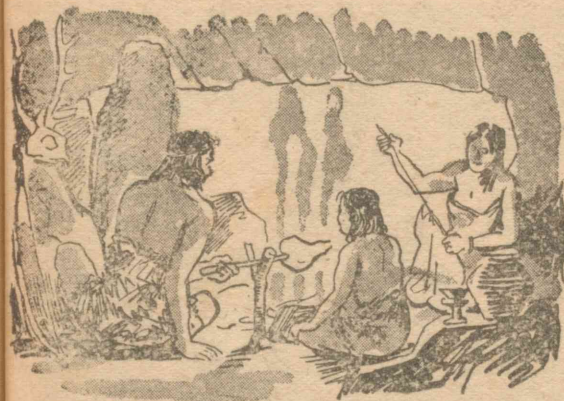
もあつたことでしよう。そんなときには、人々はけだものをおいはらって、自分たちのすまいにしました。ほらあなは、ほかのかくれ場所より、寒さをふせぐのにべんりでした。また夜になっても、おそろしいけだものから、みをまもるのにつごうがよかったです。それで、大むかしの人々にとっては、ほらあなは、たいそうよいすま

に、鉄と石とをうちあわせる方法は、マッチの発明されるまで、長いあいだ使われていたものです。いちばんはじめに、人間の住んでいた家は、人間は、さいしよのころ、木の上を、自分のすまいとして、ねとまりしていたといわれています。また、大きな岩のかけや、大きな木の下や、くぼんだ土地や、やぶのかけなどのような、ちよつとしたかくれ場所に、からだをよこにしてねむっていたといわれています。

人間のさいしよのすまいは、雨やつゆや風をかんだんにふせげるくらいのそまつなものでした。しかしそのうち、人々は、すばらしいすまいをみつめました。それは、ひとりでにできているほらあなです。そのなかには、けだものがすんでいたもの

いだったのでした。

人々は、夜になると、ほらあなにはいり、入口に石や木の枝などを積みかさねて、おそろしいけどものにみつけれぬようにしました。そのうえ、人間が火を使うようになってからは、



これは、ほらあなのすまいのなかの生活です。おとうさんは、火でなにかやいています。おかあさんは、ぬいものをしてるようです。

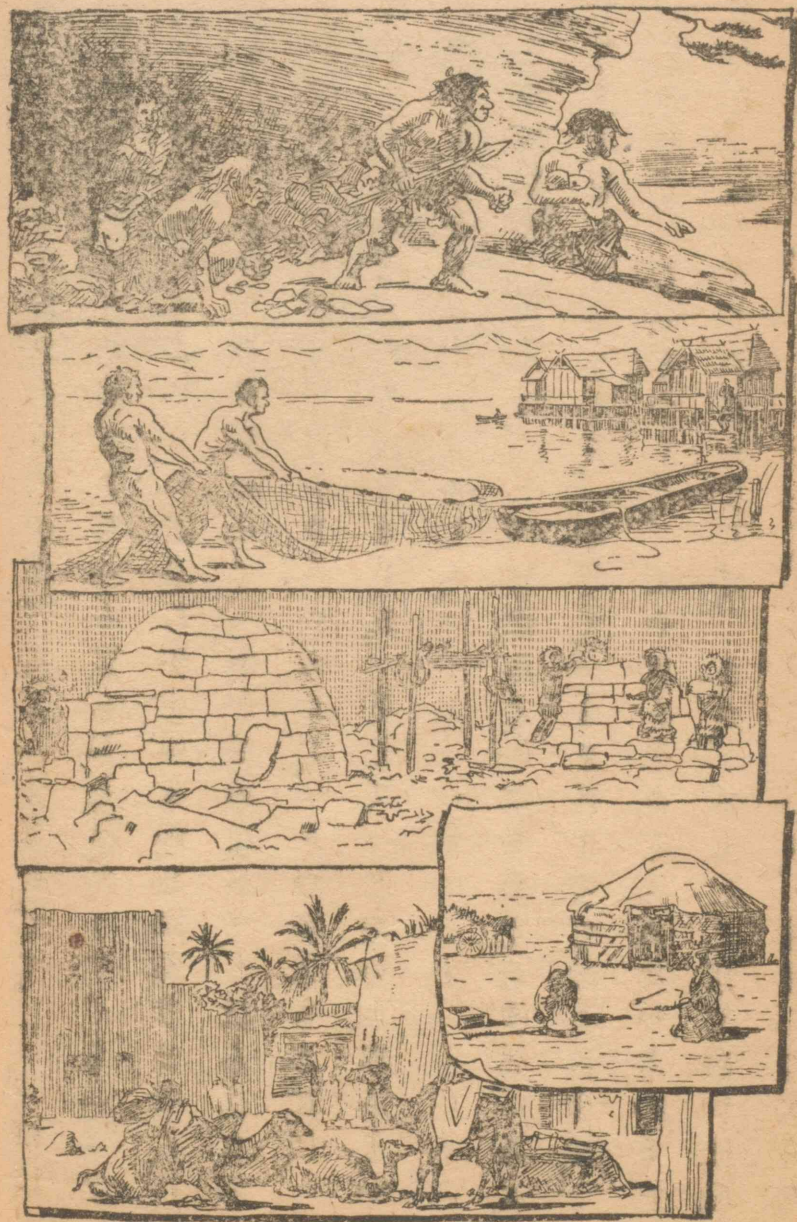
ほらあなのすまいのほうが、火をけさないようにするため、つごうがよいということもあつたので

す。  
このほらあなのすまいには、たいへん大きなものがありました。たなかには、長さが三〇〇メートル、はばも、ひろいとところになると、十

七、ハメートルほどのものがあつたということです。

しかし、ひとりでにできているほらあなは、うすぐらい手えに、じめじめしていて、いごちのよいものではありません。そこで、人々は、力をあわせて、木や石の道具で、ほらあなのなかのかべをけずり、ゆかをたいらにし、入口のふきんには、火をたくためのあなもほりました。そして、しだいに家らしいかつこうをつくっていきました。

そののちも、人々は、もつと住みよい家をつくらうと、たえずくふうをしていました。そして、あるところでは、人々は、石をつんで、こやをつくり、雨や風をふせぐために、そのうちがわを、ねんどでかためました。また、あるところでは、土地にあなをほり、はしらをたて、やねをふいて、すまいをつくる



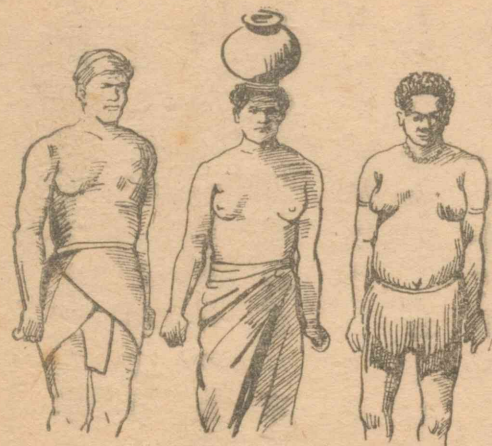
ことをはじめるとなつたのです。こうなればもうりっぱに、  
 人間の手でつくつた家だといふことが出来るでしょう。

ところが、このやうなふつうの家のほかに、この廣い世界に  
 は、たいへんかわつたすまいをつくつていた人々もいました。  
 それは、わざわざ、岸に近い水の上に、すまいをつくつて住ん  
 でいた人々です。このやうな家は、みずうみの多い土地によく  
 あつたもので、ヨーロッパの山國スイスなどからも、そのやう  
 なすまいのあとがみつけたされています。今でも、南洋のあつ  
 い地方では、こんなすまいに住んでいる人々がいます。  
 こういふ人々は、どうしてこんな水の上に、わざわざすまい  
 をつくつたのでしよう。それはたぶん、おそろしいてきやけた  
 ものが、おそいかかるのをふせぐのにつごうがよかつたからだ

と考えられます。

人間はどんなきものをきていたでしようか

たべものにするために、つかまえてころしたけだもののかわを、いったい人間はどうしまつてたのでしようか。ほらあなを



五、六万年むかし、ヨーロッパの人々は、このようなきものをきていました。日本でも、大むかしの人々は、こんなきものを「毛」とよんでいました。南のあつい地方では、今でもこんなきものをきる人々があります。

すみかとしていた人々は、きつと、ほらあなのすみの方に、つみかさね、夜になると、寒さをふせぐために、それをかぶったり、下にしいたりしてねむったことでしょう。人間のさいしよのきものは、このようなけだもののかわたとい



むかしの人々のうちには、こんなぼうさんのけさのきものもありません。インドでは、今でもみんなこんなきものをきています。

われていきます。

それで、人々はどういうわけか、毛がわをきはじめたのでしようか。それは、寒さをふせぐため

毛がわが美しかったので、それをきておしやれをしてみたか

たのでしようか。それはどちらだったか、よくわかっていません。

しかし、だれかがきつと、自

分のからだをすっぽりつつむ

ことのできるような、大きな

毛がわをほしくなったのでし

ょう。そして、そのために、



日本の大むかしの人々も、やはりこんなきものをきていたときがありました。

たぶん、はじめは、一まい一まい毛がわにあなをあけ、ほそ長い毛がわや木のかわ、草のくきなどで、むすびあわせてみただけでしょう。このようなことをくりかえして、人々はしだいに、ものをぬうということをおぼえていったのでした。

しかし、あなたがたも知っているように、けだもののなまのかわは、かたくてごつごつしていて、きもちのよくないものです。それで、人々は、いろいろな石の道具やつの道具を使つて、なんかいもなんかいもけずつたり、水にひやしたり、あるいは、あぶらのようなものをなすつたりして、やわらかくなるようにくふうしました。

こうして、はじめて、かたいなまのかわは、からだにさわつてもきもちのよい、りっぱな毛がわになりました。人々は、は

じめ、このようにして毛がわをきものにしたり、しきものにしたりしていったのでした。

しかし、毛がわは、きものにするには、まだかたくて、よいものとはいえません。それに毛がわは、ほしいときに、いつても手にはいるとはかぎっていません。ことに人々が、かりゅうどやりようしのようなくらしをやめて、だんだんひやくしようらしいくらしをはじめると、毛がわは、ますます手にいれにくくなります。そこで、人々は、なんとかして、ほかのものをきもの材料にしたい、と考えはじめました。

そこで、人々が氣づいたのは、やわらかくてじょうぶな、長い草のくきや、木のすじをよりあわせて、それをたてとよこに、かわりばんこにくんであむ方法でした。この方法を使ってはじ



大むかしの人々は、こんなふうにして、きものきれや、しきものをつくっていたのでしよう。

めで、人々は、たいへんやわらかいきものをつくりだすことに成功したのです。

このようにして、人々は、それこそ、なん千年もかかって、しだいに、りっぱなきもの材料をみつければ、それで、おりものをつくるようになっていったのでした。

動物をならし、植物をそ

だてることをはじめた人間

はじめ、人間は、かりやりようをしながら、動物をつかまえて、自分たちのたべものとしていましたが、そのうち、こんどは、けだものをころしてしまわず、よくかいならして、いろいろ役にたたせることができるようになってきました。

いったいどういうわけで、人々は、けだものをかいならすようになつたのでしうか。

人間は、弓矢のような、かりにはたいへんつごうのよい道具を發明しました。しかし、それでも、かりをすることは、らくなしごとではありませんでした。そのうえ、きせつによつて、えものがおおいときと、すくないときとがあります。とりやけだものが、たくさんいるきせつには、えものが、たくさんあつ





これは、エジプトの大むかしの人々が、<sup>すいぎゅう</sup>水牛を使って、田をたがやしているところです。

るよりも、こいぬのうちからかいならして、ばんをさせたり、

けどりにして、かつておくようになりました。いちばんさいしよ、人間がかいならしたけだものは、いぬだといわれています。いぬは動物のうちでは、こんにちまで、ほんとうに長いあいだ、人間にいちばんよくなれた、なかのよい友たちでした。いぬもはじめは、にくやかわをとるためにかつていたのでしようが、そのうち人々は、いぬが、人間のいうことをたいそうよくきく動物で、かりにつれていけば、ひじょうに役だつということを知つたのです。それで、人々は、にくやかわをと

て、たべきれないほどでしたが、とりやけだものがすくないきせつになると、どうしてもえものが手にはいらず、たべものにこまることもよくありました。こんなとき、つかれきつて、おなかのすいた人々は、きつと、とりやけだものが、いつても、ひとつの場所にたくさんあつまつていればよいのに、と思つてくやしがつたことでしょう。

ところがあるとき、たいへんあたまのよいひとりの人が、けだものをいけどりにしてきて、自分のすまいの近くに、かこいをつくつてやしなつておいたらどうだろう、と思いつきました。そうすれば、ほしいときにそれをころして、にくでも、かわでも、道具にするつのも、すぐ手にいれることができるわけです。このときから、人々は、けだものをできるだけたくさんい

かりにつれていったりしたほうが、かえつてためになることに  
氣づいたのでした。このことは、うしやひつじや、やぎやぶた  
などについても、おなじでした。つかまえてすぐころしてしま  
うよりも、えさをたべさせて、そだてたほうが、大きくもなる  
し、かずもふえてくるのがわかったのです。



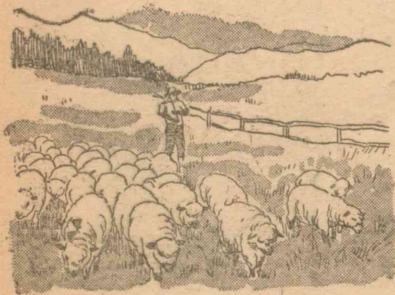
エジプトの大むかしの人々が、  
うしのちちをとっているところ  
です。この絵は、古いかべ  
にかいてあったものです。

こうして、人々は、動物を、かいならすばかりでなく、そだて  
ることもおぼえました。そのために、どんな  
に人々のくらしがらくになったことでし  
か。これで人々は、かりのときに、えもの  
すくないことを心配するひつようはなくなつ  
たわけです。

そのうえ、にくやかわが、たべものやきも

のとして役だつばかりでなく、ちちをとることのできるものも  
あるし、人間のかわりに、おもい荷物をはこんでくれるものも  
あります。そこで、人々は、いろいろのけだものを、それぞれ  
の使いみちにしたがつて、いつそう役にたつようにかいならし  
たり、よいしゆるいものにかえたりするようになっていきま  
した。

しかし、どんなな土地の人々でも、みんながおなじように、動  
物をかいならすようになつたのではありません。メキシコのも  
かしの人などは、うしやひつじをならすことを知りませんでした。  
また、こんにちでも、まだ、私たちがかいならすことので  
きない動物もいます。人々が、はじめに、動物をかいならした  
ときは、こんにちほど、そのしゆるいがたくさんあつたわけ

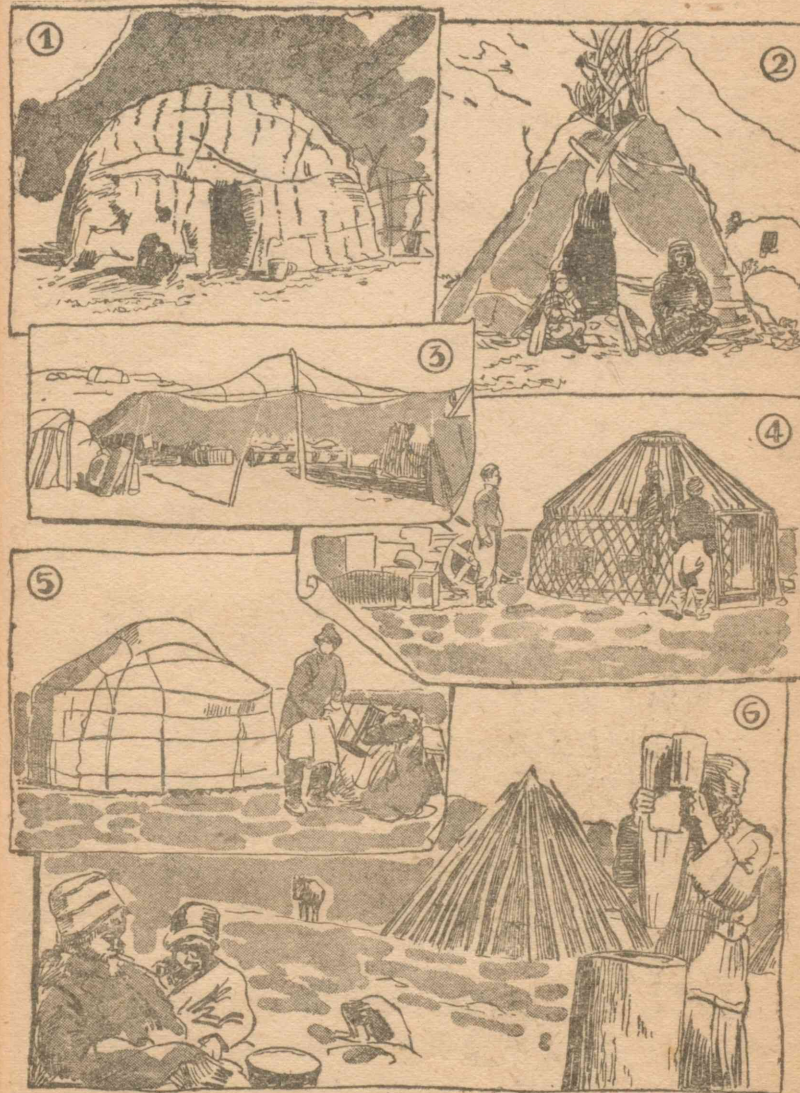


ひつじをかっている今のぼく  
じょう



いろいろなかちく

はなかつたのです。  
このようにして、人々は、動物をかいておだてることをおぼえ  
ましたが、そののち、かりやりようをやめて、動物をかいておだ  
てることだけをしごとにする人もでてきました。そういう人た  
ちは、うしやひつじをかいたがら、うしやひつじにたべさせる  
ことのできる、やわらかい草のたくさんはえているところをさ



これは、いろいろな土地で、かちくをおいながら旅をしている  
人々の家をしめたものです。

①南のあつい土地に住むベルシアの人々 ②ヨーロッパの北の  
土地に住んでいるラップの人々 ③ひつじをかうアフリカの人  
人 ④⑤⑥アジアに住んでいるいろいろな人々



がして、旅をつづけたのです。今でも、モ  
ウコの地方には、このようなくらしをして  
いる人々が住んでいます。

動物をかいそだてることをした人々は、こ  
んどはおなじように、野にはえている植物をそだてることをや  
りました。これまでも、男の人たちが、とりやけだものをさが  
して、野山を歩きまわっているときに、女の人、のいちご・  
くるみ・りんご・なしのような草のみ、木のみをさがして、は  
たらいていたのです。ですから、男の人、女の人、いちに  
ちじゅう、たべものを手にいれるために、いそがしくらしを  
しなければならなかったわけです。すこしでもなまけると、た  
ちまち、おなかがすいて、うえじにをしてもなまけると、た

す。そこで、人々は、動物をつかまえてきて、それをそだてた  
ように、野にはえた植物を、自分たちで、そだてることをはじ  
めたのでした。

人々は、そのために、おいしいたべもののとれる植物のまわ  
りにはえているざつそうをひきぬいて、すくすくとのびそだつ  
ようにしました。また、ひとりのちゅういぶかい人は、とつて



これは、石のくわでたがやして  
いるところです。こんなく  
わでは、どんなに力があるこ  
とでしょう。

きた草のみのたねがこぼれおちたと  
ころに、一年たつと、新しいめがで  
て、おなじ草のみがはえてくるのを  
発見しました。小さいたねから、大  
きなみがとれる。そこで、人々は、  
たねをまいて、植物をそだてること

をおぼえたのです。

こんにち、私たちのたいせつなたべものをつくってくれる農業ぎやうというしごと、もとは、このようにして、はじめたものなのです。はじめは、ほんのおぎないぐらいにしかならぬほどのものだったのですが、やりかたをくふうすれば、どしどしたべものが手にはいることがわかったので、あちらこちらで、



農業だけをしごとにする人がでてきました。それに、道具もしいによくなつてきましたから、もう農業は、女の人だけにまかしておけるしごとではなくな



まめ・ひえ・あわ

って、男の人たちが、力をあわせ、それをせんもんにしてやらなければならぬほど、たいせつなしごとになってきました。

### 金ぞくの道具

まえにもお話ししたように、はじめ、人間は、ほかのけだものとおなじように、長いあいだ、道具を使うことを知らずにいました。しかし、そのうちに、どうとう石の道具を使うことをおぼえて、それをいろいろつくりかえて、しだいに、べんりな道具をつくりだすようになりました。

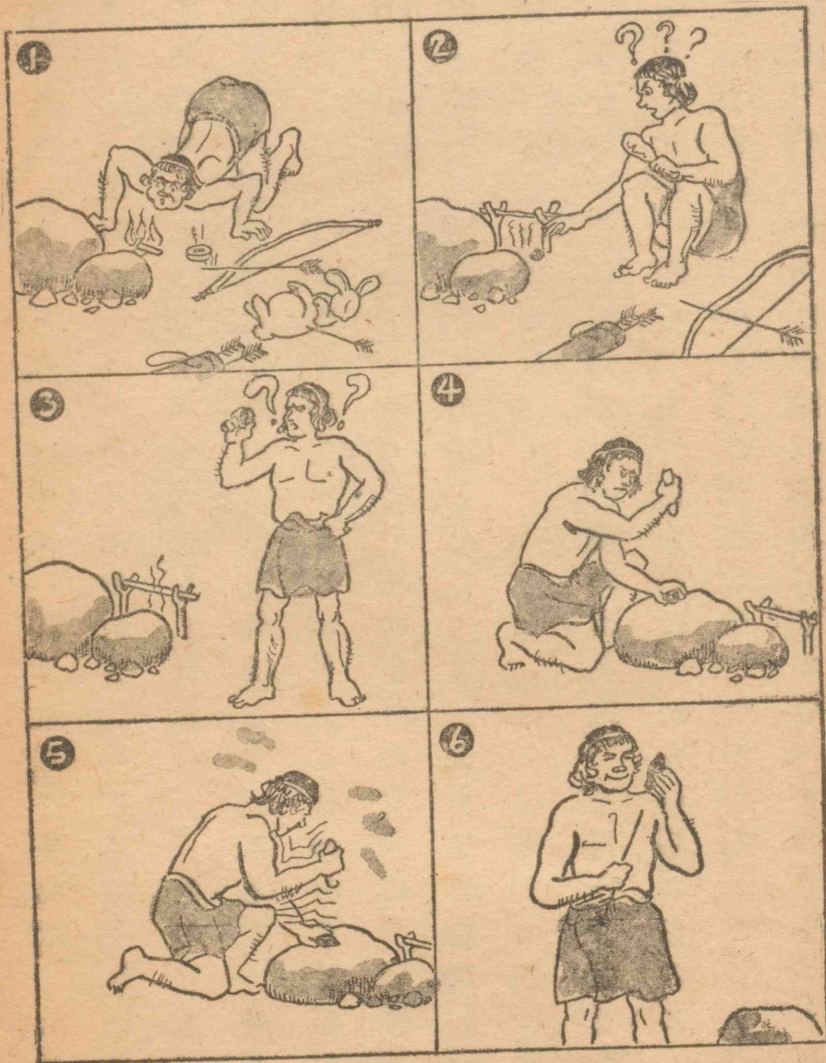
人々のくらしも、それにつれて、だんだんべんりになり、らくに生活していくことができるようになってきました。しかし、ここまでいくには、ほんとうに、長い長いとしつきがたっていたのです。そのうえ人間は、それからあとも、なん万年まんねんも、なん

万年ものあいだ、石の道具ばかりつくりつづけていきました。そしてやつと、けだものをかい、農業をはじめるところになって、銅どうでこしらえた道具を使うようになったのです。

人間の使っていた石のおのほ、けだもののかたいあたまやほねをうちくるとき、どうかしたはずみで、ひびがはいつてわれてしまうことが、たびたびありました。ですから、人間はいつも、もつとよい道具はないものかと、考えつづけていたにちがひありません。もちろん、つのはねの道具もありましたが、それでは、おもい大きな道具はつくれませんし、だいいち、材料がたくさんはありませんでした。それに、石の道具をつくるのにぐあいのよいかたい石も、長いあいだ、人間が手あたりしだいに使っているうちには、だんだん、みづかりにくくなつて

きたことでしょう。このことは、石の道具や石のぶきにばかりたよつてくらしていた人々にとつては、すてておけないたいへんなことでした。道具がなければ、たちまち、まいにちのたべものにもこまつてしまうからです。そういうわけで、人間は、目をさらのようにして、もつとほかに道具にするよい材料はないかと、さがしまわつたのでした。

ところが、あるとき、道具にする石をさがしまわつていたひとりの人が、みなれないめずらしい石をみつけました。みどり色をしたおもい石です。道具にこまつていた人間は、ためしにこれを、かたい石でたたいてみました。ところが、ふしぎなことには、その石はわれなくて、つぶれてひらたくのびていくてはありませんか。たたけばたくほどうすくひろがつて、いたの



これは、大むかしの人が、どんなふうにして金ぞくを使うようになったかということをそうぞうして、絵にかいてみたものです。あなたがたも、ひとつ考えてごらん下さい。

ようになっていくふしぎな石。手でまげてみると、いくらでも思うようにまがる石。まんなかをたたいてみると、へこんでさらのようなかたちにもなります。「これはいい道具になる。人間は、きつとこう思ったにちがいありません。石だと思ったこのめずらしいものが、銅だったのです。こうして、人間は、銅を道具に使うことを考えつきました。

人間が、早くから知っていた金ぞくには、あのびかびか光る、美しい金がありました。いちばんはじめに、道具にした金ぞくは、銅だったのです。

いろいろな金ぞく、今、私たちは、かぞえきれないほどたくさん金ぞくを使っています。きん・ぎん・どう・てつ・すず・ニッケル・あえん・なまり・アルミニウムなどのほか、人々がそれらをもとにして新しくつくりだした金ぞくもあります。これからも、もつともつと新しい金ぞくがつくりだされていくでしょう。

この新しい銅の道具を使いはじめた人々のうちのだれかが、

あるとき、それを火のなかにいれました。それは、ふとしたはずみで、火のなかへおとしたのかもかもしれません。それとも、わざとためしにやってみたのかもしれない。そのとき、あついで火のなかで、どろどろにとけた銅は、火がきえて、ひえてくるど、こんどはかたくかたまるということがわかりました。人間は、そのときから、ねんどや石のかたのなかに、とけて、どろどろになつた銅をながしこんで、思うようなかたちをつくることをおぼえたのでした。

しかし、これだけでは、銅の道具は、まだりっぱなものとはいえません。銅でつくつたおのは、かたい石のおのにくらべると、はもまがつたり、つぶれたりしやすく、こまります。銅を使つて、もつとかたい道具ができないものでしょうか。つき

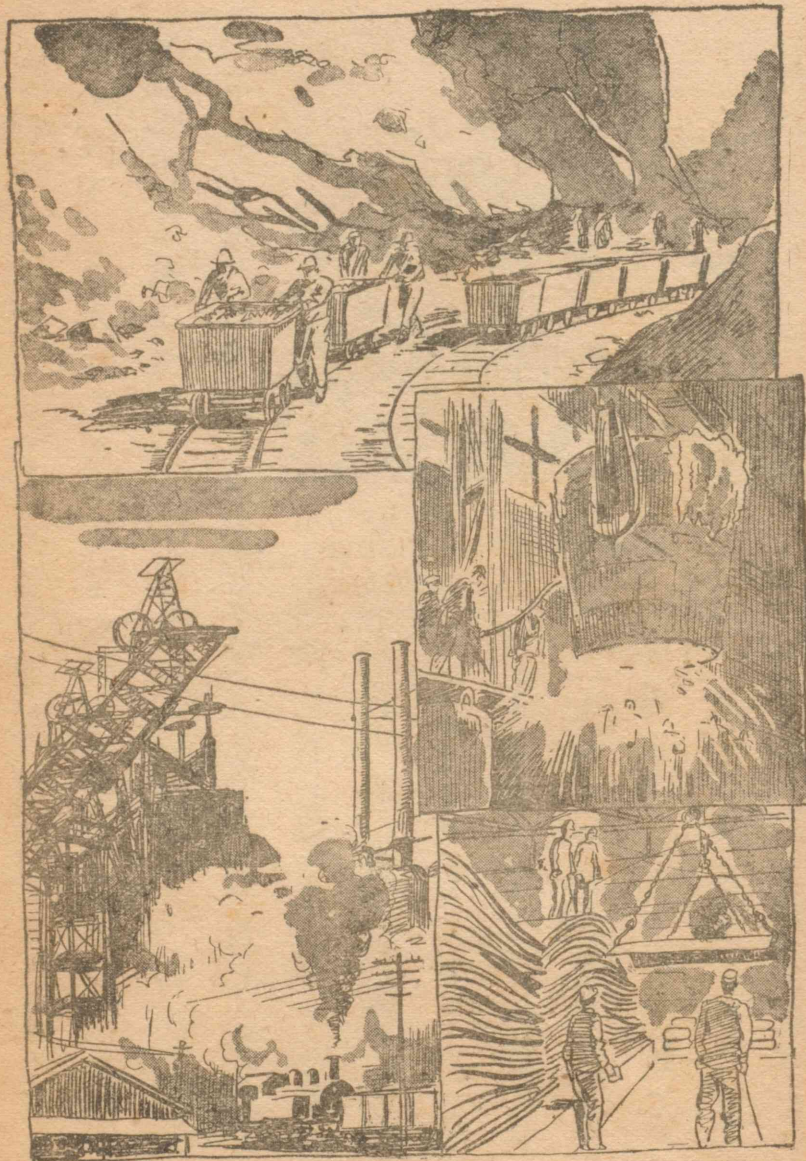
に、人間が考えたのは、このことでした。



これは、ヨーロッパの大むかしの人々が使つていた、めずらしい金ぞくの道具で、いろいろこまかいさいくがしてあります。

人間は、銅といつしよに、よく土のなから、もうひとつべつな金ぞくを、みつけたすことがありました。それは、銅よりも、もつと、火にとけやすいです。銅といつしよに火でとかしあわせてみると、ふしぎなことに、銅よりも、すすよりも、ずつとかたくて、じゅう





これは、今のすすんだ鉱山（炭坑）と、金ぞくをつくるいろいろな工場のありさまです。

ぶん道具に使え、新しい金ぞくができておりました。これが青銅です。こうして、人間は、いつのまにか青銅をつくることをおぼえたのでした。人間は、それから、もう石で道具をつくることをやめて、青銅の道具をつくりはじめました。青銅は、ねつをくわえると、やわらかくなり、うつとたいへんかたくなります。ですから、私たちのそせんにとっては、たいへんべりなものだったにちがありません。こんな大むかしに、こんにちの私たちとおなじような方法で、青銅をつくっていたということには、ほんとうに、おどろかさされるではありませんか。しかし、銅やすすも、どこでも、すぐにみつかるというものではありません。人間は、それをみつげるために、地めんの下までほりかえして、さがしまわらねばなりません。こう



つていないような人々もいます。南洋の島々には、さいきんまで、石の道具を使っていた人々もいました。また、今でも、北の寒い地方に住んでいるエスキモーの人々や、オーストラリアのひらけな地方に住んでいる人々のなかには、まだ石の道具を使つてくらしているものもあります。こういう人たちは、も



エスキモーの人々は、石のなげやりをなげるとき、それを手もてはさんでおく石の道具を使っていました。上の絵のように、この道具をにぎってなげると、やりだけがとおくとんでいきます。ヨーロッパの大むかしの人々も、これに似たものを使っていたのです。

つとべんりなすすんだ道具を、めつたに手にいれることもできないし、また手にいれても、じゆうぶんに役だたせようとしなからなのでしよう。しかしそれは、けつして人のことだけではありません。私たちも、

そせんから受けついだいろいろなものに、もつともつとくふうをくわえて、つねに新しいすすんだものをつくつていこうとしないならば、いつまでたつても、今以上によい生活をするこたはできないと思います。今の世の中は、むかしにくらべれば、たしかにべんりになっていますが、それでも、私たちのまわりには、こまつたことやふべんなことが、たくさんあるのではないでしようか。

三 私たちのそせんはどんな生活をしていたか  
—日本の大むかしの人々—

石の道具を使っていたころの日本  
のそせんのくらし

かりをする人々

私たちのそせんもやはり、はじめは、石の道具を使うことしか知りませんでした。そして、まいにち野山をかけまわって、木のみや草のみをあつめたり、けだものをとらえたり、



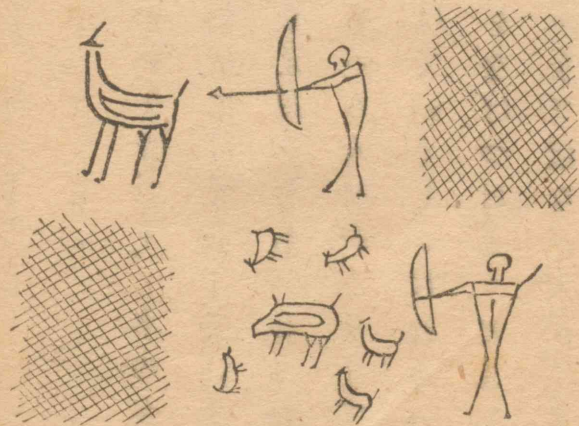
あさい海や川でさかなをとったりして、たべものとしていました。

この絵は、そのころの、森のなかのかりばです。木のおいしげった山のなかを、なんびきかのしかがにげまわっています。むこうの方には、てんでに木のぼうやえだをもち、わあわあとさけび声をあげて、しかをおいたてている人々がみえます。そのよこの方には、おいたてられていくしかにねらいをつけている人々、すきをみては、やりをなげつけようとまちぶせている人々、などがいます。ひとりのりっぱな老人が、あれこれとさしずをしてしているようです。

ごらんなさい。にげまよった一びきのしかが、だんだん森のすみの方においつめられていきます。よくこえた、大きなしか

です。あつ、とうとう、しかは、あなのようなものの中に、  
ころがりこんでしまいました。おとしあなです。うまくおとし  
あなにおいこんだ人々は、「わあつ。」と、よろこびの声をあげて  
います。

かりがおわりました。小さなえも  
のは、かたにぶらさげ、大きなえも  
のは、木のぼうにさし、みんないき  
おいよく山をくだつていきます。え  
ものが多いので、だれのかおもうれ  
しそうです。家の近くまでくると、  
かりのもようを心配してまつていた  
女や子どもたちもどびだしてきて、



これは、日本のむかしの人々が金ぞくの道具  
にほりつけたかりの絵です。

次よろこびをしていきます。

そのうちに、えものをまんなかにおいて、よろこびのえんか  
いがはじまります。よつてたかつてかわをはぎ、石のおのでほ  
ねをたたき切ります。切りとつてやいたにくをほおばり、よろ  
こびのうた声をはりあげて、おどりにむちゆうになるものもあ  
ります。それはそれは、たいへんなさわぎです。みんなが、お  
どりつかれてえんかいがおわると、人々は、なかよくえものを  
わけあい、めいめい自分の家にもちかえります。

### 道具つくり

かりやりようにでかけないとき、人々がしなければならなか  
つたたいせつなしごとのひとつは、道具つくりということでし  
た。今のようにな、買物にでかけて、なんでもほしい物を買って

くるといふことができなかつたのですから、大むかしの人は、めいめい自分の家で、ひつような道具をつくつたのです。

そのうえ、まえにもお話ししたように、かりにひつような矢じりややり、それに土をほりおこしたり、だいくしごとに使つたりするおのなど、みんな石でつくらなければなりませんでした。

石の道具

石の道具にはいろいろなものがありました。やり・つるぎ・おの・やじりなどのぶき、ほうちよう・小刀、けもののかわをばぐ道具、ぶきと道具をかねた石のぼうなどです。

左手に、けもののかわをもつて、そのあいだにかたいうすい石をはさみ、右手にもつたかたいしかのつので、石のまわりをバチバチとうちくだいて、するどいはをつけていきます。石の矢じりは、こんなふうにしてつくつたといふことです。

つりばりやさかなをつくもりなどのりようの道具も、石とお

なじようにかたいしかのつのでつくられました。つのは、さいくがしやすくて、小さいものをつくるのにつごうがよかつたからでしょう。そんなときも、石で、いちいち、つのをけずつて、こしらえたものです。

こんなにはねがおれるしごとを、日本の大むかしの人は、ずいぶん長いあいだ、やりつづけていたのです。

石や、つこの道具のほか、土の道具もありました。今のせどものもののようなものです。ねんどで、はちやかめのようないれもののかたちをつくり、火でやいてかためるのです。

ねんどを火でやくとかたくなるといふことを知って、そのやりかたで土のうつわをつくることをはじめたのは、どこのだれだかはわかっていません。しかし、日本の大むかしの人は、

ねんどでわをつくり、それを下からだんだんにつみかさねて、はちやかめをつくることをはじめめるようになりました。

世界のほかの土地では、ねんどをひ



手でこねあわせて、土のうつわをつくるところです。



まきあげてつくる土のうつわ。日本の大むかしの人々は、あまりこんなやりかたはしなかったようです。あなたがたも、ためしにやってみてごらん下さい。

このような土のうつわのつくりかたを、よく知っていました。しかし、それもはじめは、ただ、ねんどを手でこねあわせて、いれものをつくっていただけでしたが、それでは、そのふかい、大きないれものをつくるのには、ふべんです。そこで人々は、



これは、土のうつわがどんなふうにしてつくられるようになったかということをそぞうして、絵にかいてみたものです。



これは、日本のむかしの人々の使っていた土のうつわです。日本の大むかしの人々の使っていた土のうつわには、しゅるいがふたつあります。そのひとつは、うすまきやなわのめのもようのはいったものでした。人々はそのうちに、もようはかんたんでも、つくりかたのすすんだ土のうつわをつくるようになります。さし絵の上のみつつは古いもので、下のみつつは、すすんだほうのものです。

ものようにひねつて、それをだんだんまきあげて、うつわをつくるといふやりかたをしていたところもありました。日本でも、

いなかに行くとき、これによく似たやりかたをして、ただ、手でぐるぐるまきあげるかわりに、下の台をぐるぐるまわしながら、うつわをつくっているのがみられます。

日本の大むかしの人々は、このうつわが、たいへんすきでした。石の道具とちがって、自分の思うようなかたちにつくれま



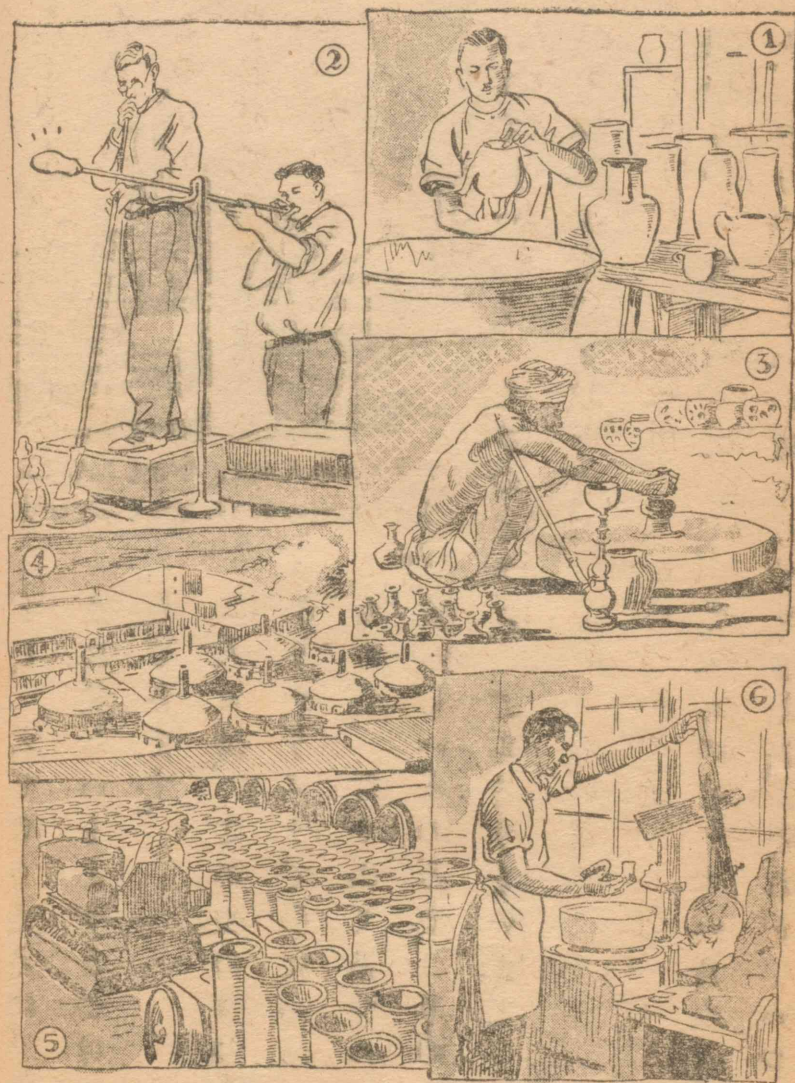
アフリカの人々は、今でもこんなふうにして土のうつわをつくっています。

すし、火でやくまえに、思うように美しいもようをつけることもできます。

人々は、この土のうつわに、かりやりようで手にいれたたべものや、野や山であつめてきたおいしい木のみや、草のみなどをいれておいたり、食事のときに、ごちそうをいれて、ならべたりするのに使ったようです。

海からかいをひろつてきて、たべものとしていた人々は、それを、自分のすまいの近くにすてました。それが、いつのまに





①③⑥は、ねんどでつくられるいろいろなうつわのつくりかた。  
 ②は、ガラスのうつわのつくりかた。④は、れんがをつくる大きなかま。⑤は、どかんをあつめてあるところ。これらは、ねんどや、そのほかの土の材料でつくられるいろいろなうつわです。

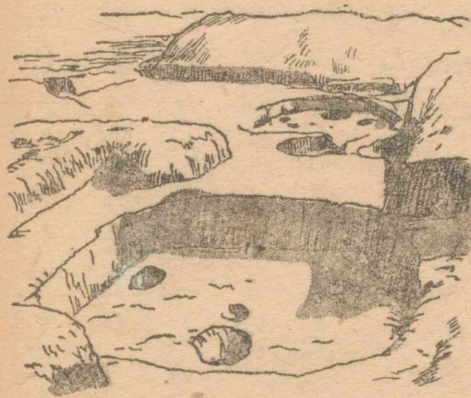
かたくさんつもつて、今でもあちらこちらから、かいがらをす  
 てたあとが発見されます。かいつかといわれるのが、これです。  
 このなかから、かいがらといっしよに、土のうつわ、石の道  
 具などがでてきます。かいつかは、大むかしの人々のごみすて  
 ばだったのでしよう。

### 住んでいた家

あなたがたは、日本の大むかしの人々が、どんな家に住んで  
 いたと思いますか。おいしいことに、そのころの家は、今では、  
 ひとつものこつていません。しかし、石の道具や、土のうつわ  
 などがほりだされた場所や、かいつかの近くには、そのころの  
 人々の住んでいた家のあとが、土のなかにうずまつて発見され  
 ます。そのような家のあとをみて、どんな家だったか、考えて

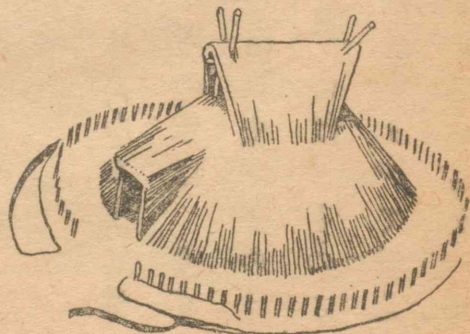
みましよう。

「えんの下のない、ちよつとみるとやねばかりできてきているような、ひくいそまつなこや、地めんには、一メートルほど、たまごのかたち、たてのあなをほつて、



たてあなの家のあとです。まるいあなは、はしらのあとです。

そこからはしらがたてられて、やねはそのはしらの上に、木の枝や草などをかぶせてつくり、家のまんなかには、小石をしいてつくつた、ろが用意してある。」きつと、こんなぐあいだったのでしよう。

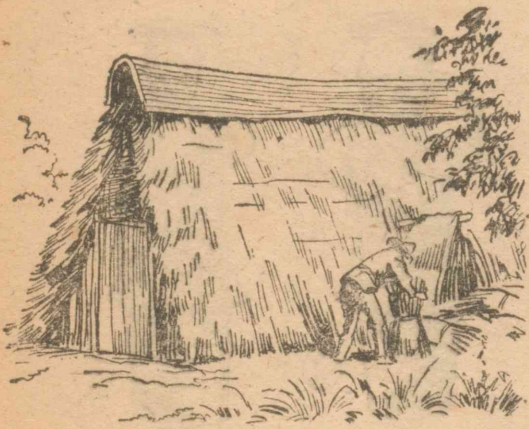


たてあなの家をそうぞうしてみると、こんなぐあいになります。

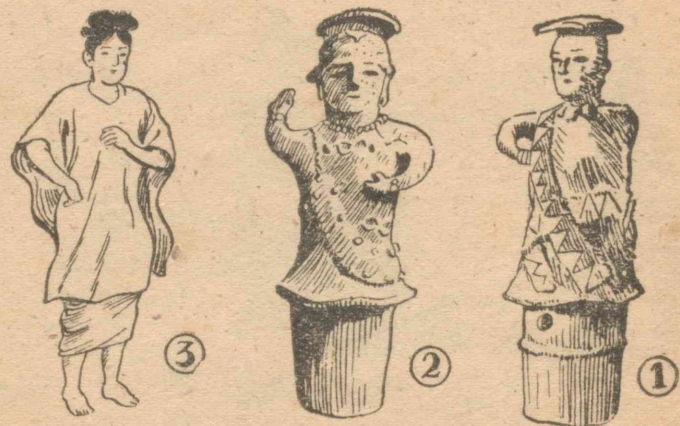
大むかしの人々にとっては、火を手にいれるのが、たいへんむずかしいことでした。地めんにあなをほつて、ひくいやねをつけたのは、ただ、雨をふせぐためばかりではありません。風がふきこんでも、火がきえないように、わざと、こんなやね

の大きな家をつくっていたのだと思われま

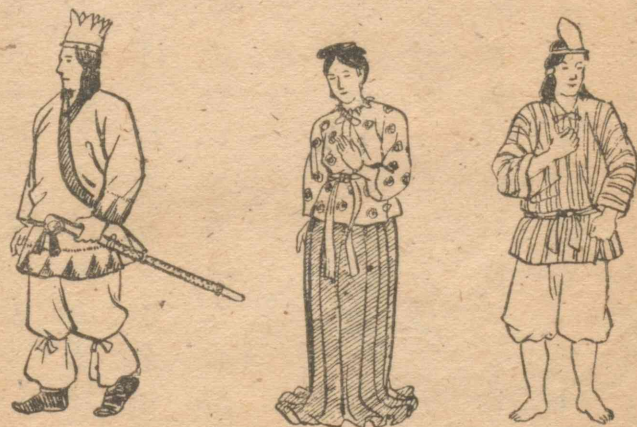
れます。日本の大むかしの人々は、はじめ、こんなそまつな「たてあな」の家に住んでいたのです。しかし、土をほつてつくる家は、どうしても、しっけが多くて、住みごちがよくありません。それで人々は、なるべくこたかい丘の



今みられるたてあなの家



①②は、大むかしの人々の使っていた、はにわというにんぎょうの  
 ようなものです。日本の人々がきていただけさというきものは、しま  
 いにはこんなふうに、たすきのようにかけてきけるようになったと  
 いわれています。③は、それが、しだいにかんたんになってでき  
 たきものです。ひとつのきれをふたつにおつて、まんなかからく  
 びがでるようにしてあります。



そのうち人々は、この絵のよう靴、下の方に、はかまや、ものよ  
 うなものをはくようになりました。こうなると、たいぶんきもの  
 らしくなります。

上や山のふもとのように、しっけのすくない土地をえらんで、  
 すまいをつくることにしていました。

かんたんなはたけづくり

まえにお話ししたように、とりやけたものは、よくとれると  
 きど、とれないときとがあります。また、お天気がわるくて、  
 思うようになりだにでかけられない日がつづくこともあります。  
 それとおなじように、木のみや草のみも、ほしいときにいつて、  
 も手にいれることができるわけではありません。ですから、か  
 りやりようだけでくらしをたてていた人々は、たべものがなく  
 てこまりぬいたこともすくなくなかったことでしよう。  
 そこで、人々は、しだいに、自分のすまいの近くにかんたん  
 なはたけをつくって、たべものを手にいれようと、くふうする

ようになりました。家のまわりには、あさく土をほつて、たねをまき、水をかけ、ざつそうを引きぬいて、草や木がそだち、みがるのをまつたのです。

はじめのうちは、ごくかんたんなはたけづくりだったので、女やこどもでも、らくにできるほどのしごとでした。ですから、男たちは、あいかわらず、かりやりようにでかけていたことでしょう。

しかし、しだいに、人間のかずがふえて、たべものがたりなくなる、こんどは男たちまで、はたけでたべものをつくるようになりました。それは、まえにもお話ししたように、はたけづくりのしごとがやりやすく、そのうえ、たべものをまぢがいなく手にいれることができると考えたからです。

男たちは、まず、草に火をつけて、野山をやきはらつてしまします。すると、土がやわらかくなり、のこつたはいがこやし肥になります。そのような土地に、あわや、ひえや、まめなどをまけば、たいへんよくのります。人々は、このようにして、だんだん、農業をはじめめるようになっていったのです。

しかし、そうなつても、人々は、まだまだ、かりやりようのくらしをやめたわけではありません。野山をやきはらつて作物をそだてることも、まだそれだけで人々のくらしがたつていくほど、大きなしごとにはなつていなかつたからです。

ところで、かりをしたり、かんたんなはたけつくりをしたりしてくらしている



これは、アメリカに住んでいるインディアンが、むかししせんにはえた米をかりとつていたときありさまです。

ど、ひとつの場所に、たくさんの人があつまつて、長いあいだ、住みつづけているわけにはいきません。その土地からとれるたべものを、したいにたべつくしてしまうからです。そこで、人は、あちらこちらにわかれて、ばらばらに住むほうがよいということに気がついてきました。しかし、わかれて住んでみるも、たべものにこまってくるも、もつとよいところをさがして、うつりあるいていくのがふつうでした。

金ぞくの道具を使うようになって、人々の生活は、どんなふうにかわってきたでしょうか

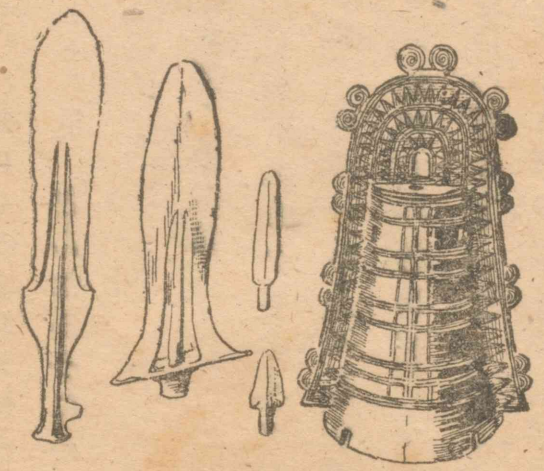
### 金ぞくの道具

日本の大むかしの人々が、長いあいだ、石の道具だけしか知らず、たいへんふべんなくらしをしていたとき、大陸から、新しい金ぞくの道具が、つたわってきました。それは、今から二〇〇〇年ぐらいまえのことだといわれています。

そのころ、大陸の人々はもちろんのこと、遠いヨーロッパの人々も、もうずつとまえから、石のかわりに、金ぞくて道具をつくっていたのです。

石の道具と金ぞくの道具とでは、たいへんなちがいがあ

す。今まで、石のほうのものでは切りにくくてこまっただけだもの  
 かわも、金ぞくのするどいはものを使えば、かんたん切りと  
 ることができます。それに、かねのほうは、かりやりようを



これは、日本のむかしの人の使っていた金ぞくの道具です。左の方のはつるぎ、右のつりがねのようなのは銅たくとよばれるがつきです。

するのにたいせつな、やじり  
 やはりをつくるのにも、たい  
 へんべんりです。ですから、  
 金ぞくの道具を使うようにな  
 ると、かりやりようもらくに  
 なり、えものが、まえよりも  
 とりやすくなつたにちがひあ  
 りません。またはたけしごと  
 をするにも、石のくわよりも

金ぞくのくわのほうは、ふかく土地をほりおこすことができて、  
 たいそうらくになります。

そればかりでなく、金ぞくの道具は、石の道具とちがつて、  
 思うとおりのかたちにしらせることができるので、うまく  
 ふうをすれば、今までにない新しい道具も、どしどしつくりだ  
 していくことができます。

このようにべんりな金ぞくの道具が、今まで石の道具しか知  
 らなかつた大むかしの日本人のあいだに、つたわってきた  
 のでした。そして、たちまち、銅や青銅でつくった道具、それ  
 ばかりでなく鉄の道具までが、ほとんどいちどきに使われるよ  
 うになりました。

いちど、この新しいべんりな道具が、人々のあいだにつたわ

ると、たゞものも、手にはいりやすくなり、したがって、てすうもかからなくなり、また、それだけ時間にもゆとりができて、その時間をもっとほかのしごとに使うことができます。こうして新しいべんりな道具を使うことを知った人々は、それを知らない人々よりも、もつとすすんだ、らくなくらしかたをするようになっていったのです。

銅たく 銅たくとよばれる青銅の道具は、いついなにに使われたのでしょうか。つりがねをたいらにしたようなものですが、たぶんおまつりのときなどに使った道具だったのだろうといわれています。大陸の人々も、これによく似た銅のたいこを使っていました。それが、日本につたわったのだといわれています。

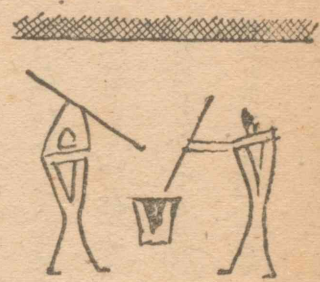
### お米づくり

金ぞくの道具が、大陸からつたわってから、はたけづくりもたいへんすすんできました。作物のしゆるいもふえてきました。

そして、その新しい作物のなかに、お米がありました。お米をつくりはじめてから、日本人のくらしは、たいそうかわつてくるのです。

今では、日本じゅうどここの土地にいても、農家ノカの人々は、たいていお米づくりを、おもなじごとに行っています。このお米づくりは、もともと、南のあつい地方ではじまったものだと、いわれています。それが、大陸につたわり、そこから、日本につたわってきたのでした。

新しい金ぞくの道具をもつてきた人々は、このお米のつくりかたを、人々におしえました。それまで、かんたんにはたけをつくつて、あわ・むぎ・まめなどがとれるのをたのしみにして、いた人々は、こうして、田をつくり水をひいて、いねをそだて、



大むかしの人がお米をついているところです。この絵は、銅たぐにかいてあったものです。

お米をつくる新しい農業をはじめようになつたのです。

しかし、水田をつくるには、水をためておくいけ、水をひきいれるみぞなどをほるといふ大しごとをやらなくてはなりません。ですから、たくさんの人々が、力をあわせてやらなければ、りっぱな田はつくれなかつたわけです。それに、田をつくるには、べんりな道具がひつようだったので、こんなとき、金どくの道具は、たいへん役にたつたのでした。

人々は、ひとつの土地に住みつかなければならなくなつた

お米つくりをはじめた人々は、まもなく、もうまへのように、たべものをさがして、歩きまわることができないことに気がつ

きました。もし、田うえをしただけ、ほうつておいて、ほかの土地にたべものをさがしにいったとしたら、どんなことがおこるでしょう。けだものが、田をあらしにくるかもしれませぬ。また、ほかの人がやつてきて、いつのまにかみのつたお米をとつていつてしまふかもしれませぬ。それに、手いれをしないで、せつかく、苦心しいねをうえても、よくみのらないでしよう。ですから、それをふ



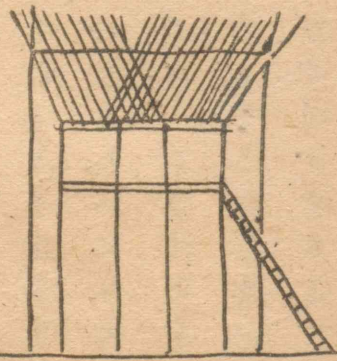
人々はひとつの土地に住みついて、はたけしごとをはじめます。



せぐためには、田の近くにすまいをつくって、田うえから、お米がみのるまで、こしをおちつけて、せわをしなければならぬとなります。

人々は、このようにして、あちらこちらうつりあるくくらしをやめて、ひとつの土地に住みつくようになっていきました。水田をつくるには、水をひくにつごうのよい土地がべんりです。それで、人々は、川ぞいの土地にうつり住むようになりました。しかし、あまり川ぞいのひくい土地では、大雨のときなど、よくこうずいがおこつて、田もすまいも水びたしになつてしまいます。それで、はじめは、川ぞいの土地でも、こうずいなどにおそわれるきけんのすくない場所に、田やすまいをつくつたのでした。

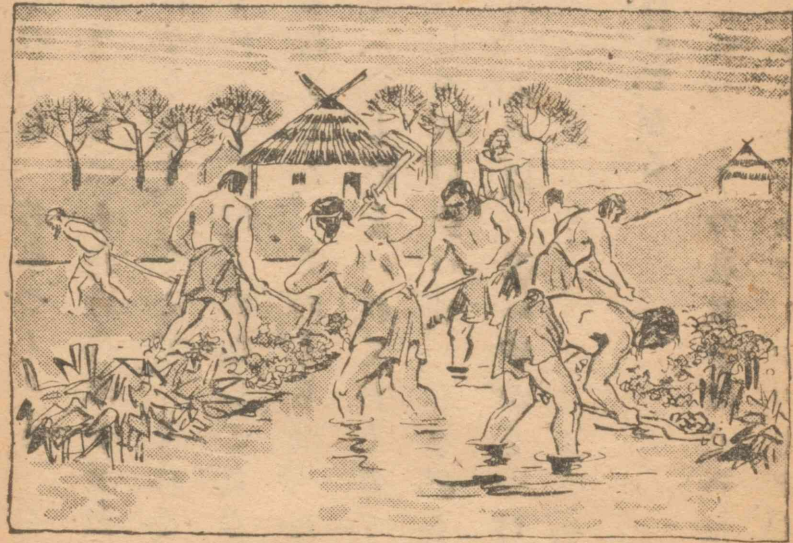
そのうち、お米づくりも、だんだんうまくなつてくると、一年じゆうたべるだけの米がとれるようになります。そこで、それをしまつておくんですが、あちらこちらにつくられました。そのくらは、たいせつなたべものをいれておくのですから、しつけが多いと、ものがくさりやすくこまります。そのため、人々は、高いゆかをつくらうようになるようになりました。



これは、銅たぐにかかれて  
いる高いゆかのあるく  
らの絵です。

### 村ができる

お米づくりの農業をはじめた人々は、川ぞいの、水をひくのべんりな土地にうつつて住みはじめました。しかし、人々は、

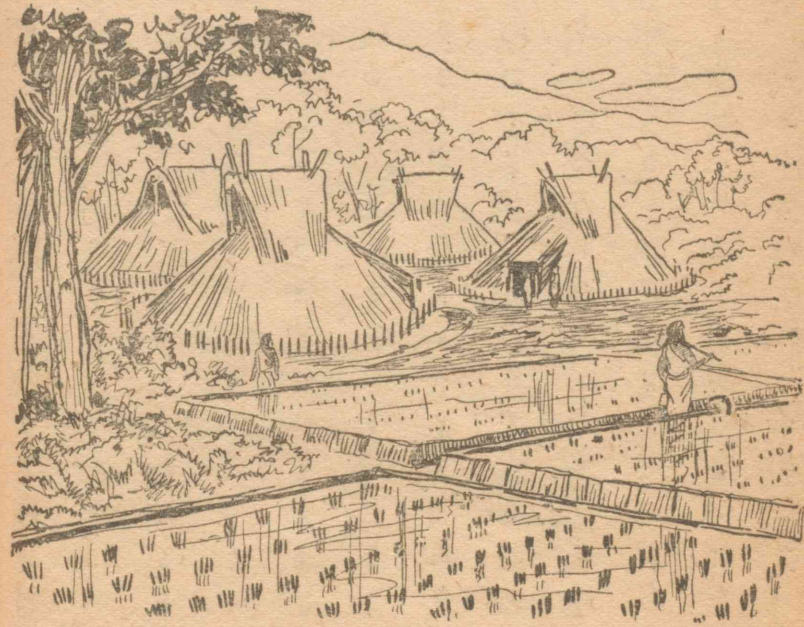


これは、大むかしの人々が、田に水をひくみぞをつくっているところです。

ここで、いろいろなむずかしいもんだいにつかりました。川ぞいの土地でも、長いあいだ、すこしも雨が降らないときには、水ぶそくてこまることがあります。また、そのはんたいに、大雨が降つて、こうずいがおこり、田もすまいも水びたしになつてしまうこともあります。

そこで人々は、水ぶそくのときの用意に、ためいけをつくることをはじめました。しかし、ためいけをつくつただけではまだたりません。ためいけや川から、どうして、自分の田へ水をもつてくればよいのでしょうか。いちいち、水がめて水をくんでほんでくるのでは、てすうがかかつてたまりません。それで人々は、みぞをつくつて、ためいけや川から、自分の田へ水をひくことをはじめました。そして、それとともに、こうずいをふせぐため、川にていぼうをつくることをはじめました。

しかし、こういう大きなしごとは、とてもひとりやふたりの力でできるものではありません。たくさんの人々が力をあわせてしごどをすることが、どうしてもひつようです。また、かしらになつて、けいかくをたて、さしずをする人がなくては、し



大むかしの日本の村のありさまを、こんなふうにとらえてみることもできるでしょう。

ごどがはかどりません。  
こうして、お米つくりの農業がさかんになるにつれて、したいにたくさんの人のあつまりができるようになっていきました。そして、あちらこちらに、ぶらくのようなものができあがりしました。村は、このようにしてはじまったのです。

村ができれば、そのうちに、村の人々をさしずするかしらもきまります。こうして、人々は、ひとつの場所にたくさんの人があつまって、力をあわせていくことをおぼえたのです。人々は、ひとりの人の力ではできないことでも、たすけあつてやりとげることができました。村には、たくさんの人々がいるので、みぞをつくつたり、ためいけをつくつたり、ていぼうをきずいたりするよう大きなしごとをするのにも、たいへんべんりだったのです。そのおかげで、お米づくりもらくになり、作物のしゅうかくも、ずいぶんふえていきました。それでも、はじめはまだぶらくをつくつて、いつしよに生活するということを知らなかった人々もあつたでしょう。しかし、てきにせめられたときなど、ぶらくをつくつていいるぼうが

心づよいので、だんだんぶらぐになかまいり七ました。また、ぶらぐとぶらぐとがいつしよになつて、大きなぶらぐができるようにもなつていきました。

このように、お米をつくりはじめるようになってから、世の中は、むかしとすつかりかわつてきました。人々は、今までとはちがつて、ひとつの土地に住みついて、助けあつてくらすよ  
うになりました。

しかし、ぶらぐをつくつて生活していると、ほかのぶらぐか  
らせめられることもありますし、ぶらぐの人々のうちで、あら  
そいのおこることもあります。そのようなときに、人々のさし  
ずをしててきをふせいだり、あらそいをおさめたりするのが、  
村のかしらのやくめでした。ですから、かしらになる人は、村

の人々のなかでも、たいてい年とつた、ちえのある人がえらば  
れたのです。

そのうちに、ぶらぐがしだいに大きくなると、かしらのしご  
どもたいへんいそがしくなつてきます。しかし、それとともに、  
かしらのいうことをきく人のかずも、どんどんふえてきます。  
そこで、大きなぶらぐのかしらは、たくさんの人たちから、た  
いそううやまわれるようになっていきました。

## 教師のかたがたへ

社会科学習指導要領補説には、第三学年の主要経験領域が「地域社会の生活〔大昔の生活と比較して〕」と示されている。この期の児童は、全く文明のひらけない不自由な時代の人々の生活に、しばしば興味を示すものであることは、われわれの多く経験するところである。

この「大むかしの人々」は、人類や日本の文明のひらけない大昔の未開の生活およびわれわれの祖先の生活に取材して、現在の人間生活・社会生活に対する目をひらき、これについて知識や理解を廣め、かつ深めることを、その主要なねらいとしているが、あわせて、できる限り必要な資料をも提供しようとした。

しかし、ここにおさめられたものは、その意味からいっても、決して十分なものとはいえないかもしれない。故に教師は、実際にあたっては、できる限り、さし絵その他の内容をおぎなつて、指導に役立たせていただきたい。

またこの本の内容は、四年用として配本される「日本のむかしと今」を読むために必要な理解や知識をあたえるのにもきわめて役立つものが多い。したがつて、その意味で、「日本のむかしと今」の序説をなすということもできる。ただ、前述のように、この本の内容が、第三学年の児童の興味に適應し、したがつて役立つものが多いと考えられるため、三年にも用いることにしたのである。

その意味で、この二つの本は、三年・四年を問わず、児童の理解の程度に應じて、適宜に融通して、使用するよう配慮していただければ幸いである。

社会科 第三学年用  
大むかしの人々  
Approved by Ministry of Education  
(Date Sept. 27, 1948)

昭和二十三年九月二十七日 翻刻印刷  
昭和二十三年十月三十日 翻刻発行  
〔昭和二十三年十月三十日 文部省検査済〕 定価 金拾五円九拾銭

著作権所有

文 部 省

翻刻発行 東京都北区堀船町一丁目八五七番地  
兼印刷者 東京書籍株式会社

代表者 長 得 一

印刷所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地  
東京書籍株式会社

発行所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地  
東京書籍株式会社

広島大学図書

2000041374

